



伊勢斎宮と滋賀

花園大学 助教授
曾根 誠一

1. はじめに

三重県伊勢市にある伊勢神宮は、学校の遠足や家族旅行などで、訪れたことのある人がおられるでしょう。平成5（1993）年は、持統4（690）年から始まった、20年に1度新しい社殿を建ててご神体を移す遷宮祭の年に当たっていましたので、テレビのニュースなどで見た人も多いことでしょう。

この伊勢神宮には、昔「斎宮」と呼ばれる独身の天皇の娘（内親王か女王）がお仕えしていましたが、このことは、現在あまり知られていないようです。そこで、伊勢の斎宮のことを紹介しながら、滋賀との関わりについても、いささか述べてみたいと思います。

2. 伊勢神宮の斎宮

伊勢神宮には、天照大御神をお祭りする内宮（伊勢市宇治）と豊受大御神をお祭りする外宮（伊勢市山田）の、二つの社殿があります。天照大御神は、もともと天皇の住居である宮中にお祭りしていましたが、崇神天皇の時、豊鍬入姫が奈良の笠縫村に移し、さらに垂仁天皇の時、倭姫が神様の導きでお祭りす



伊勢神宮 内宮（「お伊勢まいり」口絵より）

る場所を、五十鈴川沿いの現在の地に移したといわれています。これが内宮の始まりです。豊受大御神は、五穀（食べ物）を管理する神様であり、天照大御神の朝夕の食事を準備することを仕事としていますので、伊勢神宮の中心は、天照大御神をお祭りする内宮であるといえます。

このようにして、伊勢神宮すなわち天照大御神に、時の天皇に代わってお仕えする巫女としての「斎宮」は誕生したといわれていますが、どの天皇の時代にも斎宮が決定・派遣され、制度として固まり受け継がれてゆくようになったのは、天武朝（673）年になってからのことでした。この間、豊鍬入姫・倭姫など初期の人々で、伝承されてはいるものの歴史的には確認できない斎宮は、9人にのぼっています。

制度として確立された、天武朝の最初の斎宮・大来皇女から、南北朝時代の初頭・後醍醐朝の祥子内親王の時に廃止（1334年以降）されるまでの660年あまりの間に64人の斎宮が決定されています。これを時代別に分けると、奈良時代11人、平安時代44人、鎌倉時代8人、南北朝時代1人となります。鎌倉時代の斎宮が少ない理由としては、それまで途絶えることなく引き継がれてきた決定が、後深草朝（1246年）で初めてなされず、以降新たに天皇が即位しても、斎宮を決定しないことが増えてきたことを指摘できます。そして、斎宮を決定しても、その時の天皇の崩御などで伊勢に赴任しないことが続き、南北朝時代という1つの国に2つの政府が生まれる時代

を迎えて、齋宮制度は廃止されることになりました。

齋宮の伊勢在任期間の平均は、天皇の譲位や親の死去による喪や本人の死去によって伊勢に赴任しなかった例を除いて計算すると、奈良時代で5.8年（在任年数不明者を除く）、平安時代で9.1年、鎌倉時代で6.6年となっており、全体の平均としては、8.3年となっています。決定された時の年齢は、ほとんどの場合5歳から15歳の間におさまり、最年少で2歳、最年長で28歳でした。また、伊勢在任期間の長かった齋宮としては、醍醐朝（897年）の柔子内親王が32年間と最も長く、次いで、一条朝（986年）の恭子女王が23年間、後一条朝（1016年）の嫡子女王と堀河朝（1086年）の善子内親王が19年間となっており、10年を超えて伊勢に滞在した齋宮は、16人を数えました。当時、内親王や女王は、その高貴な身分にふさわしい高い地位の男性がいない場合は、生涯独身を通すのが常識であったとはいえ、都から遠く離れた伊勢の地で、約8年あまりもの青春の日々を厳しい潔斎（慎み）のなかに送るのですから、さまざまな思いが心に去来したことでしょう。

『源氏物語』で、伊勢の齋宮として、14歳から21歳までの8年間伊勢に赴任していた齋宮女御（後の秋好中宮）は、光源氏の後見を得て22歳で冷泉天皇と結婚しています。しかし、14歳から17歳くらいで結婚するのが普通であった当時において、20歳を超えて結婚する例は、このような特別な事情のある場合を除いては見られず、『源氏物語』では、25歳を超えて結婚した例は見られません。ですから、伊勢の齋宮になることは、青春を天皇家の祖先・天照大御神にささげることがを意味していたといえましょう。

3. 齋宮の決め方

齋宮は、精進潔斎（厳しい慎み）して、天照大御神にお仕えすることを仕事としていましたので、齋内親王といい、これを略して「齋

王」と呼ぶのが本来の名称です。それなのに齋宮とも呼んだのは、伊勢国多気郡にあった齋王の身のまわりのお世話をする役所を齋宮寮という、その名を取ったからでして、今ではこの通称の方がよく知られているようです。また、その住居は、地名を取って「竹の宮」とも呼ばれました。

齋宮を新たに決める必要は、天皇が即位した時と、すでに伊勢に赴任している齋宮が、親の死去や本人の病気や過失によって退いた時に生じました。決定の具体的方法を、1100年頃に大江匡房がまとめた儀式書『江家次第』にもとづいて説明すると、まず、伊勢の齋王を占いで決定する日時を決めます。時間としては、深夜に行われるのが一般的でした（当時、重要な儀式は皆深夜に行われていました）。そして、天皇から指示された内親王（独身の内親王がいない場合は、女王）の名前を「〇〇内親王」と紙に書きます。それを視箱に入れて紙で封をし、その上に「封」の字を書きます。国家の祭祀を担当する中臣氏の祭主（責任者）は、これを受け取って占い、結果がよければ「合」、よくなかった場合はその理由を封の上にも書きました。占いは、穴を開けた四角い亀のお腹の甲羅を焼いた時のひびの入り方で、適否を決めていたようです。これを摂政・関白など、その時最も地位の高い人が封を開けて確認し、天皇に報告します。天皇がご覧になった後、この会議の責任者が、「〇〇内親王」が伊勢の齋王に決まったことを宣言して、儀式は終わります。

この決定は、近衛府の次官がすぐに勅使として内親王の家に行き、伊勢の齋王に決定されたことを報告します。また、朝廷では、初齋院を担当する役職者が決められます。初齋院は、内裏の雅楽寮や主殿寮など適当なところに設けられ、齋宮は厳しい慎みの日々を過ごしました。翌年8月、宮城外の地に新たな宮殿を建てて、野宮としました。平安時代は、多く嵯峨野に建てられたことから、現在嵯峨

野に野々宮神社が建っていますが、奈良時代には、特に決まった場所はありませんでした。齋宮は、ここでさらに翌年の8月まで、合計3年にわたって、精進潔斎の日々を送りました。

齋宮になると、忌詞いみことばといって、使うことを許されない言葉が16ありました。仏様を中子なかご、お経を染紙そめがみ、お寺を瓦葺かわらぶき、お坊さんを髪長かみなが、死ぬことを「なおる」、病気を「やすみ」、血を「あせ」などと、別の言葉に置き換えて使いました。仏教や穢れけがに関わる言葉が禁止されていたといえます。

4. 齋宮の群行

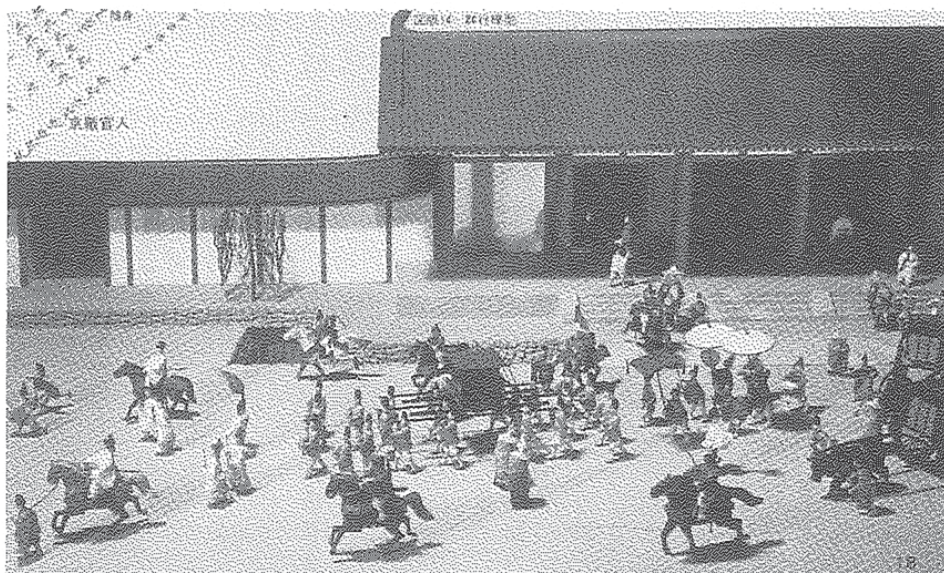
齋宮は、決定されてから3年目の9月に、伊勢神宮の神嘗祭かんなめさいにあわせて、都から伊勢へと旅立ちます。これを群行ぐんこうといいます。奈良時代は、伊賀から伊勢へ抜ける官道を通りました。平安時代は、初期の陽成朝ようせい(876年)までは、滋賀から伊賀を経由して伊勢に赴きましたが、光孝朝の繁子内親王の時(886年)から行路が変わり、伊賀路を使わず、滋賀から直接伊勢へ行くようになりました。行路沿いの国々では、1か月前から仏事が禁止されました。

『江家次第』によると、野宮を出た齋宮は、まず桂川(葛野川や鴨川の場合もあり)で禊みそぎを行い身を清めた後、内裏の大極殿だいごくでんでの儀式

に臨みます。そこで、中臣氏の祭主が、この齋王は恒例の3年間厳しい慎みを守り、天照大御神の「御杖代みづえしろ」(杖となって仕える者)と決めてさしあげる内親王である、という天皇の言葉を読み上げます。そして、天皇は、「別れの櫛つげ」(長さ6センチの黄楊製)を齋宮の額髪ひたいがみに挿しながら、「京の方に赴き給ふな」(任期が終わるまでは、都にお帰りになってはならない)と、別れを告げます。この櫛は、群行出発後、最初の宿泊地である瀬田の頓宮とんぐう(仮の御殿)に到着するまでは、そのまま挿しておきました。

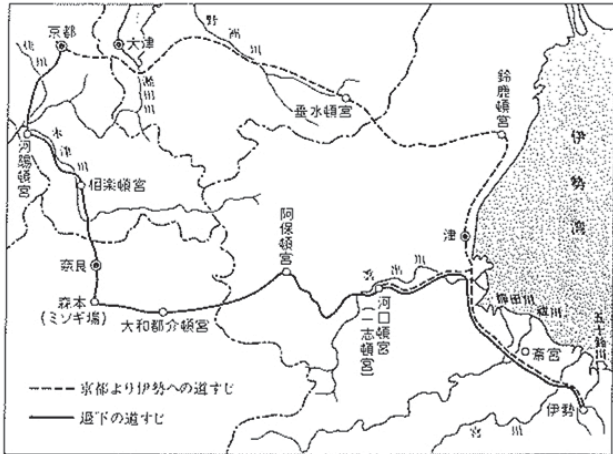
内裏を出発した齋宮は、粟田口あわたぐちから逢坂山を越える東海道を通過して、途中6か所の境界の川で禊をしながら、5泊6日の群行をして伊勢へと向かいました。川は大地を分断しており、川を越えてゆくことは、新しい未知の世界へ旅立つことでした。『伊勢物語』の主人公「昔男」が、川を越えるたびに都のことを思いやっているのは、こうした理由があったからでしょう。禊をする川は、山城(白川か)・瀬田川・甲賀(野洲)川・鈴鹿川・下樋小川・多気川であり、宿泊をするのは、滋賀の国府(瀬田)・甲賀・垂水・鈴鹿・一志に造られた頓宮でした。

このように齋宮と滋賀は、群行の行路——禊や宿泊の地として、関わりがあったわけ



群行模型(「齋宮歴史博物館総合案内」より)

です。精進潔斎という厳しい慎みの3年を過ごして都を後にし、伊勢へ赴く群行5泊のうち、3泊を過ごした瀬田・甲賀・垂水の頓宮と近江路について、文学関係の資料としては、鳥羽朝の永久4(1116)年『齋宮宣旨家名所歌合さいぐうせんじけめいしょうたあわせ』の「みそぎ川」を詠んだ二首しか残っていません。これも「名所」を詠んだものであって、



京都から伊勢へ(津田由伎子著「齋王」学生社より)

群行の時の詠歌ではありませんので、都を出発して日も浅いため精神的緊張が解けず、和歌を詠む心のゆとりを持つことができなかったのでしょうか。

群行の際、頓宮で詠んだことが明示されている和歌は、次の一首だけです。

齋宮群行の鈴鹿の頓宮にて、旅の歌
詠み侍りける 通俊

急ぐとも今日は泊まらむ旅寝する^{あし かり}葦の仮
庵に紅葉散りけり(白河朝・媞子内親王)

藤原通俊(1047~99年)の和歌は、「先を急ぐとしても、今日は鈴鹿の頓宮に泊まることにしよう。旅寝をする葦で造った粗末な家に、紅葉がはらはらと舞い散り美しいことだから」という意味であり、風情のある和歌となっています。この他に、地名を詠んだものとしては、鈴鹿山が五首と最も多く、忘井が一首あるだけです。

- ・思ふことなるといふなる鈴鹿山越えて
うれしき境とぞ聞く(村上朝・楽子内親王)
- ・別れ行く都の方の恋しきにいざ結び見
む忘井の水(齋宮甲斐・鳥羽朝・姁子内親王)

鈴鹿山を詠んだ村上天皇(926~67年)の和歌は、「齋宮が伊勢に赴くと国が安らかに治まり、思い通りになるといふ鈴鹿山は、越えるのがうれしい山であると聞くことだ」という意味です。鈴鹿山を越えると、ようやく伊勢

の国に入りますので、特に感慨深く思われたのでしょうし、だからこそ、和歌も多く詠まれたのでしょう。

忘井を詠んだ齋宮甲斐(生没年未詳)の和歌は、「別れ遠ざかってゆく都が恋しいので、物事を忘れるという忘井の水をすくって飲もう」という意味です。1度赴任したら、天皇が退位するか、親が死去するか、自らの病気あるいは過失によって退くか、これ以外の理由では都に戻れなかった齋宮とお付きの者は、都での生活を断念して群行の途についたはずなのですが、なかなか断念しきれぬものではありません。そこで、忘井の水の力を借りて忘れてしまいたい、と詠んでいるのです。

5. 伊勢での日々

多気郡の齋宮寮に到着した齋宮は、内・中・外と三院あるうちの内院を住居としました。齋宮寮は、最初の伊勢齋宮・倭姫の時に、五十鈴川沿いの^{わたらい}度会に置かれ、^{いそ}磯の宮と呼ばれたといわれています。何時から多気に移ったのか、はっきりしていません。齋宮寮と伊勢神宮は、約15キロも離れているため、早くから途中の度会に^{りきゅうのいん}離宮院(旅の宮)が造られ、神宮に参拝する時は、ここに滞在しました。^{じゅんな}淳和朝の天長元(824)年、齋宮寮を度会の離宮院に移しましたが、^{にんみょう}仁明朝の承和6(839)年、火災によって再び多気に戻りました。

齋宮が行う祭祀のほとんどは、齋宮寮で行われました。伊勢神宮に参拝するのは、6・12月の月次祭と9月の神嘗祭の3回だけで、いずれも15日に離宮院に入り、16日に外宮、17日に内宮を参拝し、18日には多気に戻りました。伊勢での日々は、緊張感はあるものの、びやかなものでもあったようです。

滋賀文化財教室シリーズ No.143号

発行年月日 1994年2月10日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525